

## 奇数からなる群数列

— 群数列の一考察 —

数列を学ぶ際、偶数や奇数の列がよく用いられる。そのうち、奇数の列については、その和が

$$1+3+\cdots+(2n-1)=n^2$$

であるように、生徒の興味をひく性質が多い。

ここでは、群数列の代表的な例について、その性質を数学的帰納法を利用して証明してみよう。

**(例題 1)** 1 から始まる奇数の列を、 $n$  番目に  $n$  個の奇数が属するように、

$$(1), (3, 5), (7, 9, 11), \cdots$$

と群にまとめて並べるとき、第  $n$  群の中央の数は  $n^2$  であることを示せ。

ただし、 $n$  が偶数のときは、 $n^2$  は群の中央に隣合う 2 つの奇数の間の偶数を表す。

**<解>** 数学的帰納法で証明する。

$n=1$  のときは、明らかに成り立つ。

$n=k$  のとき、第  $k$  群の中央の数が  $k^2$  あるとする。このとき、 $k=2m-1$  ( $m$  は自然数) ならば、 $k+1$  番目の群には、 $2m$  個の奇数があり、中央の隣り合う奇数の間の偶数は、

$$\begin{aligned} & k^2 + 2\{(m-1)+m\} + 1 \\ &= (2m-1)^2 + 2(2m-1) + 1 \\ &= (2m)^2 = (k+1)^2 \end{aligned}$$



また、 $k=2m$  ( $m$  は自然数) ならば、 $k+1$  番目の群には、 $2m+1$  個の奇数があり、中央の奇数は、

$$\begin{aligned} & k^2 + 1 + 2(m+m) = (2m)^2 + 2(2m) + 1 \\ &= (2m+1)^2 = (k+1)^2 \end{aligned}$$



以上から、すべての自然数  $n$  について、第  $n$  群の中央の数は  $n^2$  であることが成り立つ。 **<終>**

この結果から、偶数からなる群数列の中央の数を簡単に求めることもできる。

すなわち、2 から始まる偶数の列において、 $n$  番目に  $n$  個の偶数が属するように、

$$(2), (4, 6), (8, 10, 12), \cdots$$

と群にまとめて並べるとき、この群数列は、奇数からなる群数列

$$(1), (3, 5), (7, 9, 11), \cdots$$

を構成する各数に 1 を加えた数である。

すると、奇数からなる群数列の第  $n$  群の中央の数が  $n^2$  であることから、偶数からなる群数列の第  $n$  群の中央の数は  $n^2 + 1$  である。

同様に、自然数からなる群数列

$$(1), (2, 3), (4, 5, 6), \cdots$$

の第  $n$  群の中央の数は、 $\frac{n^2+1}{2}$  であることがわかる。

さらに、次のような群数列を考えてみよう。

**(例題 2)** 2 から始まる偶数の列を、 $n$  番目に  $2n-1$  個の偶数が属するように、

$$(2), (4, 6, 8), (10, 12, 14, 16, 18, \dots), \cdots$$

と群にまとめて並べるとき、第  $n$  群の最後の数は  $2n^2$  であることを示せ。

**<解>** 数学的帰納法で証明する。

$n=1$  のときは、明らかに成り立つ。

$n=k$  のとき、第  $k$  群の最後の数が  $2k^2$  あるとする。このとき、 $k+1$  番目の群には

$$2(k+1)-1 = 2k+1 \text{ (個)}$$

の偶数が存在するから、その最後の数は、

$$2k^2 + 2(2k+1) = 2(k+1)^2$$

よって、 $n=k+1$  のときも成り立つ。

以上から、すべての自然数  $n$  について、第  $n$  群の最後の数は  $2n^2$  であることが成り立つ。 **<終>**

例題 1 は、群数列の授業で、生徒が発見したものである。数列は、生徒の自由な発想が活かされる教材である。一般的な解法と合わせ、生徒の発想を生かした授業を展開してみたいものである。